全日本中学校長会賞

# あのときに、ありがとう

福岡県　明治学園中学校　一学年

能美　にな

「あのときの自分に、ありがとうだな。」

三年前、母がガンと診断された。見慣れた母の胸の皮膚の下にある、二センチにも満たないしこり。診断からわずか二週間後に手術を終えた母は、今度はすぐに抗ガン剤による化学療法を行うことになった。

母の闘病開始とほぼ同時に、私の生活も変わっていった。まず、我が家の味噌汁の味が変わった。母が治療によって味覚障害を発症していたのだ。すべてが金属のような味に感じて水すらも飲めないらしく、料理の味見ができない。心配させないよう、私も辛いながら出来上がったものを黙って完食していたのだが、結局ばれた。必然的に、日々の食事は買ってきたお惣菜や外食になった。髪の毛もどんどん抜けていった。医療用ウィッグや帽子など、今まで家の中にはなかったものが増えた。化学療法は五カ月続き、当時小学生だった私は、病気はもちろん、どんどん自分の日常が変わっていくのが怖かった。小さなしこりは母の生命だけでなく、我が家の日常をも確実に脅かしていた。やっと化学療法が終了した後は休む間もなく放射線治療。毎日治療が続くため、母はついに休職せざるを得なくなった。ようやく全ての治療が終了したとき、母は言った。

「あのときの自分に、ありがとうだな。」

大学を卒業して間もないころ、母は医療保険への加入を悩んでいた。将来病気になった自分を想像すること自体が不安だったのはもちろん、まだ若かった母にとって一番の壁は、月々の保険料の支払いだった。しかし、ここが決断のときだと思いきって加入を決めたらしい。

それから十数年経ち、母は今回ガンと診断された。主治医は母に言った。

「保険の書類があったら持っていらっしゃい。大事なことだからね。」

母はそこで、もはや生活の一部として支払っていた医療保険のことを思い出して申請を行った。化学療法が始まる前には、すでに給付金が支払われていた。病気には治療費がかかる。しかも時間的な猶予もなく。病気で精神的に不安定な中、たとえ貯金があったとしても、まとまった金額が出ていくのは不安で仕方ないものなのだ、と母は私に言った。治療費だけではない。治療のための交通費や医療用ウィッグなどのお金もかかる。加えて、娘である私の生活を変えないように守っていかなければならない、という親としての焦りもあったらしい。

そんな中で安心して治療を受けられたのは、給付金のおかげで金銭面の不安が少しでも和らいだからだ、と言っていた。

私は中学生だ。まだ若く、友人と話をしていても将来の不安といえば進路の話が多い。健康障害の話はほとんど出ず、保険の話となると、お金の話としてタブー視される風潮すらある。しかし、あのとき若かった母が将来の健康について考え悩み決断したおかげで、医療保険の給付金が支払われ、私たち家族の日常が保たれて今に至る。高価な医療用ウィッグと知りながらも、母の頭に髪の毛があるのを見たときの安ど感を、私は今でも忘れることができない。保険は母の命だけではなく、一緒に暮らしていた私の心をも確かに救ってくれたのである。

母のあのときの決断は、母の命と、私たちの暮らしを守るための重要な決断だった。若いときだからこそ、自分の土台である健康を考えることが未来につながっていくのだと、今回身にしみて感じた。母のあの言葉もきっと、今こうやって暮らせている幸せを感じたからこそ出た言葉なのだ。

私からも感謝の気持ちを伝えたい。

『あのときのお母さん、ありがとう。そしてこれからのお母さん、これからも一緒に仲良く暮らしていこうね。』